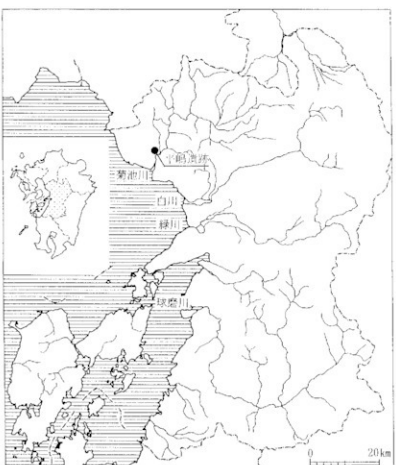
熊本県文化財調査報告第204集

平嶋遺跡

－教職員玉名住宅新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－



２００１．１２

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、教職員玉名住宅新築工事に伴う埋蔵文化財調査として、平成11年度に平嶋遺跡の発掘調査を実施しました。

玉名市山田字平嶋に所在する平嶋遺跡では弥生時代の住居跡や平安時代の土坑等が検出されました。

本報告書が埋蔵文化財とその保護に対する理解と認識を深め、活用していただく一助となれば幸いです。

埋蔵文化財調査に際しご協力いただきました方々に心より感謝申し上げます。

平成13年12月28日

熊本県教育長　田 中 力 男

例　　言

1　本書は、教職員玉名住宅新築工事に伴い事前に実施した埋蔵文化財調査（平嶋遺跡）の報告書である。
2　調査は熊本県教育委員会が実施した。
3　当該遺跡の発掘調査は平成11年度に実施し、その整理・報告書作成は平成12年度に行った。
4　現地での実測及び写真撮影は後藤貴美子、水上仁が行った。遺構の製図は横山明代が、遺物の実測は下東嘉也、後藤が、遺物の製図は横山が行った。遺物の撮影は後藤が行った。
5　当該遺跡の地形図は玉名市から提供を受けたものをもとにして作成した。
6　本書の執筆は後藤が行った。
7　本書の編集は熊本県文化課が行い、後藤が担当した。

凡　　例

1　現地での実測図は以下の縮尺で作成した。
　　住居跡・溝…1/20　　土坑…1/10　　遺構配置図…1/100
2　本書の作成の際には以下の縮尺とした。
　　住居跡・溝…1/60　　土坑…1/30　　遺構配置図…1/150
　　土器…1/3
3　遺構の方位は真北である。
4　調査区内及び遺構内のアミふせはそれぞれ次の範囲を表現している。
　　撹乱部分　　炭化物　　焼土
5　写真のスケールは紙面の都合で任意とした。
6　第Ⅱ章で示した周辺主要遺跡分布図及び主要遺跡名については、平成10年発行の「熊本県遺跡地図」（熊本県教育委員会）と同様の番号を付した。
7　図版にある出土遺物の写真に付した番号は、実測図の番号である。
　　例）13－8　第13図の「8」
8　その他の凡例については挿図ごとに付した。

序文
例言・凡例

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要
　第１節　調査の経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……1
第Ⅱ章　遺跡の概要
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……6
　第３節　遺跡の層位と包含層……7
第Ⅲ章　調査の成果
　第１節　弥生時代の遺構と遺物……9
　第２節　古代の遺構と遺物……22
　第３節　その他の遺構と遺物……27
第Ⅳ章　まとめ……33

報告書抄録
図版

挿 図 目 次

第１図　周辺地形図……2
第２図　地形区分図……3
第３図　平嶋遺跡周辺主要遺跡分布図……4
第４図　土層模式図……7
第５図　竪穴住居跡全体配置図……9
第６図　１号竪穴住居跡実測図……10
第７図　２号竪穴住居跡実測図……11
第８図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図……11
第９図　３号竪穴住居跡実測図……12
第10図　３号竪穴住居跡出土遺物実測図……12
第11図　４号竪穴住居跡遺物出土状況……13
第12図　４号竪穴住居跡実測図……13
第13図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図（１）…14
第14図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図（２）…15
第15図　５号竪穴住居跡実測図……15
第16図　５号竪穴住居跡出土遺物実測図……15
第17図　６号竪穴住居跡実測図……16
第18図　６号竪穴住居跡出土遺物実測図……16
第19図　７号竪穴住居跡実測図……16
第20図　８号竪穴住居跡実測図……16
第21図　８号竪穴住居跡出土遺物実測図……17
第22図　９号竪穴住居跡炭化物・焼土分布図……18
第23図　９号竪穴住居跡実測図……18
第24図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図……18
第25図　10・11号竪穴住居跡実測図……19
第26図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図……19
第27図　土坑全体配置図……22
第28図　１・２号土坑実測図……23
第29図　１号土坑出土遺物実測図……23
第30図　２号土坑出土遺物実測図……23
第31図　３号土坑実測図……23
第32図　溝・不明遺構・ピット全体配置図……24
第33図　溝実測図……25
第34図　溝出土遺物実測図……26
第35図　不明遺構実測図……26

表　目　次

第１表　平嶋遺跡周辺主要遺跡地名表……５
第２表　平嶋遺跡竪穴住居跡一覧表……29
第３表　平嶋遺跡報告書掲載土器観察表……30

図 版 目 次

図版１　平嶋遺跡（１）
　　１　平嶋遺跡遠景（南から）
　　２　平嶋遺跡調査区全景（南東から）
図版２　平嶋遺跡（２）
　　１　溝遺物出土状況（全体）
　　２　溝遺物出土状況（部分）
　　３　溝完掘状況（全体）
　　４　溝完掘状況（部分）
　　５　４号竪穴住居跡遺物出土状況（全体）
　　６　４号竪穴住居跡遺物出土状況（部分）
図版３　平嶋遺跡（３）
　　１　２号竪穴住居跡完掘状況
　　２　３号竪穴住居跡完掘状況
　　３　４号竪穴住居跡完掘状況
　　４　８号竪穴住居跡完掘状況
　　５　８号竪穴住居跡南側ベッド部除去後状況
　　６　11号竪穴住居跡完掘状況
図版４　平嶋遺跡（４）
　　１　９号竪穴住居跡炭化物出土状況
　　２　２号土坑遺物出土状況（全体）
　　３　２号土坑遺物出土状況（部分）
図版５　平嶋遺跡出土遺物（１）
図版６　平嶋遺跡出土遺物（２）

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査の経緯

平成11年、熊本県教育庁総務福利課から同文化課に対して埋蔵文化財調査が依頼された。内容は教職員玉名住宅新築工事に伴うものである。これを受けて文化課では同年７月７日に試掘調査を行った。

試掘調査では、任意に４箇所のトレンチ（試掘坑）を設定し、調査を実施した。その結果、２つのトレンチから弥生時代の土器や柱穴遺構が確認され、工事に着手する前に発掘調査が必要である旨通知した。

これを受けて熊本県教育庁総務福利課と同文化課との間で協議を重ね、本調査が必要であると文化課が回答した約1500m²のうち、遺跡に影響が及ぶと予想される約250m²の範囲について、発掘調査を実施することとした。発掘調査は平成11年10月12日に開始し、平成11年12月１日に終了した。調査期間は約1.5ヶ月である。

第２節　調査の方法と経過

発掘調査は住宅建設予定地の東側半分について実施したもので、幅約７m、長さ約33m である。北辺の２箇所は階段部分となっており、幅約３m、長さ約７m の長方形が張り出している。

調査に用いる基準点は調査区内外に任意で設置した。グリッドは３m ごとに設定し、長辺の北東から順に１から11の数字を、短辺の北西から順にＡからＦのアルファベットをあてた。

調査区は旧教職員住宅を取り壊したあと整地されており、表土を50～100cm はいだところから建物の基礎をはじめとする撹乱が縦横にはしる状況であった。表土剥ぎ後の状況としては、当該地の高い箇所を削り、低い部分に盛土する形で平坦面が造成されており、東側の削平が特に顕著であった。

調査区西側にはほぼ南北方向に推定幅６m 前後、深さ約２m の溝が検出されたが、地山が粘性の強い土であるため滑りやすく、特に安全面で注意を払いながら掘り進めた。

出土した遺物は弥生時代のものが大部分であった。部分的にトレンチ（試掘坑）を設定し掘削したがその下位から遺構や遺物は確認されず、調査を終了した。

◎調査の組織

調査主体　　熊本県教育委員会

■発掘調査（平成11年度）

調査責任者　豊田貞二
（首席教育審議員兼文化課長）
川上康治（課長補佐）
調査総括　島津義昭（課長補佐）
江本　直
（主幹兼文化財調査第２係長）
調査担当　後藤貴美子（文化財保護主事）
水上　仁（嘱託）
調査事務　小斎久代（総務係長）
廣瀬泰之（参事）
川口久夫（主事）

■報告書作成（平成12年度）

調査責任者　阪井大文（文化課長）
川上康治（課長補佐）
調査総括　島津義昭（課長補佐）
江本　直
（主幹兼文化財調査第２係長）
調査担当　後藤貴美子（文化財保護主事）
横山明代（嘱託）
下東嘉也（嘱託）
調査事務　中村幸宏（主幹兼総務係長）
廣瀬泰之（参事）
杉村輝彦（主事）

第 1 図　　周 辺 地 形 図　(1：5,000)

第Ⅱ章　遺跡の概要

第１節　地理的環境

遺跡が所在する熊本県玉名市は県北に位置する。行政区画でみると玉名市は北を玉名郡南関町、西を荒尾市・同郡岱明町、南を同郡横島町・同郡天水町、東を同郡玉東町・同郡菊水町とにそれぞれ接している。本遺跡が所在する玉名市山田は市の西部に位置し、隣接する玉名市築地をはさんで岱明町と接する地点にある。

菊池川はこの玉名市の北東から南西にかけて貫流する一級河川で本流が全長約61km、流域面積はおよそ996km^{2}におよぶ。川は阿蘇外輪山の西方にある尾ノ岳に源を発し、上流では水流が発電に利用され、景勝地である菊池渓谷を有している。中流では平野部周囲の台地に阿蘇溶結凝灰岩が露呈し、石材の産地となっているところもある。下流では県下有数の穀倉地帯である玉名平野を形成する。この沖積平野は遠浅の海岸部とつながり有明海に流れ込んでいる。この地域の活発な干拓事業は加藤清正の時代に始まり、のち現代に至るまで随時行われてきた。

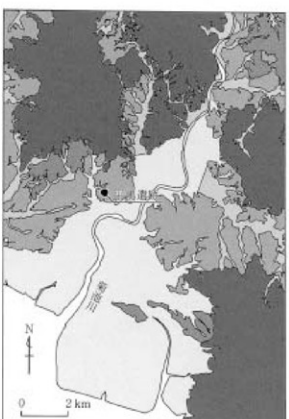
玉名市周辺の地勢を概観すると、西方は有明海（島原湾）に面し、北方から東方、南方にかけては300～600m前後の山々が点在する。菊池川下流域には平野・干拓地がひらけ、山地との間に沖積低地、台地・丘陵が広がっている。

本遺跡の北方には小岱山地がある。小岱山は筒ヶ岳（501.4m）を主峰とし、南南西から北北東にかけて直線状の尾根をもつ。山腹の傾斜角は20～40度で、急峻な傾斜地が多い。

小岱山とそのまわりには花崗岩が広く分布する。花崗岩は筒ヶ岳花崗岩と玉名花崗閃緑岩に大別され、前者は白雲母の結晶を含み角閃石の結晶を含まない点、後者は白雲母の結晶は含まないが角閃石の結晶を含む点が異なる。小岱山麓では花崗岩が風化して堆積した粘土を産し、陶土として利用されている。

遺跡は小岱山の南麓に位置しており、山地から台地、さらに平野部へ向かって傾斜する縁辺部にあたる。標高は12～13mで、調査区の南方から西方にかけては盛り土をして平坦面を拡張している。（盛土をした平坦面は発掘本調査対象地外にも広がっている。）

遺跡の西方には小岱山南麓に源を発する境川が菊池川右岸に沿って南流し、そのまま有明海へ注いでいる。



第　2　図　　地　形　区　分　図

第　３　図　　平　嶋　遺　跡　周　辺　主　要　遺　跡　分　布　図

第　1　表　　平　嶋　遺　跡　周　辺　主　要　遺　跡　地　名　表

遺跡番号	遺　跡　名	所在地	時代	種別	指定	備　　考
206-029	石貫薬師	石貫　薬師	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器片多量、土師器
206-045	青木遺跡字曽	青木　面代上面田	中世	石造物	県	無銘板碑20数軍の梵字あり
206-054	西面支石墓	柴尾　亀河	弥生	埋葬		弥生・石器出土
206-063	五郎丸	山田　上馬場	弥生	包蔵地		須恵器甕、他の弥生土器を採出
206-083	山田平塩	山田　平塩	弥生	包蔵地		合口甕棺1基出土
206-084	山田松尾平	山田　平	弥生	包蔵地		塩合地断層面、弥生壺土器片・石器
206-091	玉名厚老舗	立願寺　石丸	古代	包蔵地		上立願寺遺跡北辺、布目瓦多量散布
206-093	松尾原	立願寺　松尾原ほか	弥生	埋葬		合口の大小甕棺15個出土、土立願寺遺跡
206-097	本黒野老舗	立願寺　西の段	古代	包蔵地	市	瓦有了頭配列
206-098	下立願寺	立願寺　西の段	縄文・中世	集落		単式遺構、弥生土器片散布
206-109	大焼古墳	玉名　陽止	古墳	古墳	国	横穴2基、三角連続線彫あり
206-116	岡崎式石棺群	玉名　上原	弥生	埋葬		粉砕分の墓地内3基・2基保存
206-117	永安寺西古墳	玉名（連称永安寺）	古墳	古墳	国	横穴墓、同墳墓
206-118	永安寺東古墳	玉名（連称永安寺）	古墳	古墳	国	横穴墓、円・三角・舟・馬を描く
206-138	馬場門前遺	鍋見岡　前坂	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器・土師器・須恵器包含、本田中
206-155	伊美寺善和院跡	築地　南大門	中世	寺社	市	伝若・伝観等出土、現在新寺建つ、同上墓は市指定
206-160	東大門	築地　東大門	弥生～古代	埋葬		石棺一部宅地地蔵土器包含
206-162	東鹿大門	築地　南大門	弥生～中世	包蔵地		弥生集落、土師器多量出土
206-163	古屋	築地　古屋	弥生～中世	包蔵地		合口甕棺基出土、弥生土器散布、鉄器・弥生壺塚
206-164	築地東	築地　東	弥生	包蔵地		石斧土坑
206-174	高岡原	山田　高岡原	弥生・古墳	包蔵地		土師器・須恵器・弥生土器片散布
206-175	高岡いっちょう畑横式石	山田　高岡原	弥生	埋葬		箱式石棺のみ遺跡
206-178	玉名高校本庭	中　横林	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器・土師器弧合、石器も出土
206-184	南無	中　内田	弥生	包蔵地		弥生ホメ幅、合口ホメ幅、青銅鏡、巨名高校蔵
206-186	南無塚原跡	中　内田	弥生	埋葬		同道200メ北へ、近くは弥生以降遺跡
206-196	伝忠出方遺跡	柳原本　北	古墳	古墳	市	同道300メ北横切20m の付帯、弥生土器多量
206-201	柳原本遺跡群	柳原本	弥生	包蔵地		柳原山方建の西下段、弥生土器群あり
206-202	高瀬信者墓地（高瀬洋除）	赤崎寺　東河原	近世	墓地	市	墓下用地、2基所在確認、石塔現存
206-259	高瀬蒲鉾窯	高瀬　下河	近世	建造物	県	瓦窯使用にかかる、並ぶ大型二基確認
206-212	飯面本貝塚	高瀬　飯面本町	縄文	貝塚		縄跡神社境内公園、河高貝中心
206-219	宮崎原	宮崎（通称寺崎原）	弥生～中世	包蔵地		玉名女子高横内全、弥生土器多量、住居跡
206-220	宮崎A	宮崎　池田	弥生～中世	包蔵地		大理甕棺・土師器・須恵器・弥生土器多量包含
206-227	鍋田貝塚	大倉　鍋田原	縄文	貝塚		J R線北2箇所、河高式・土師器・須恵器
206-243	亀頭道	大倉　亀頭道など	弥生～中世	包蔵地		土師器・弥生焼潰
206-245	立山	大倉　（通称立山）	弥生～中世	包蔵地		弥生住居、土師器等散布
206-292	大宗河原	大浜　上田敷	弥生～中世	包蔵地		石刀西土地
206-295	五郎丸石臨砂考地	伊倉北方　五丸	弥生	埋葬		十五丸石碑、旧城跡にあり、石台は整石か
206-297	城ヶ崎貝塚	伊倉北方　天杜下	弥生	貝塚		町北端古代台地上、前期・弥生住居跡出土多量
206-298	城ヶ崎	伊倉北方　天杜	弥生～中世	包蔵地		町北端古代台地上、広範に弥生中期遺物を含む
206-299	中北A	伊倉北方	弥生～中世	埋葬		小足内に式る墓出土、2期跡、外面都品
206-316	鹿人町貝塚	北方	弥生～中世	貝塚		
206-329	片瀬貝塚	片瀬浜　屋敷	縄文～鎌倉	貝塚		
206-321	片瀬浜	片瀬浜　屋敷	弥生	包蔵地		貝塚のある台地一帯
206-326	宮原土井の内	宮原　土井内	弥生	包蔵地		弥生土器・土器出土
206-327	横社	宮原　横社	弥生	包蔵地		弥生土器散布
206-328	伊倉宮原剪	宮原　剪	弥生	包蔵地		弥生土器散布
206-331	伊倉宮川	宮原　宮川	弥生	包蔵地		弥生土器・石器
206-335	伊倉宮の後撃投群	伊倉北方　宮の後	弥生	埋葬		合口甕棺多数
206-336	伊倉古宮塚	宮原　古宮塚	弥生	包蔵地		弥生土器・土師器・須恵器散布
206-482	柳町	玉名市河原柳町	縄文～平安	集落		県調査、文字資料
206-483	玉名平野生原跡	玉名、迎間ほか	古代～中世	屋敷		
206-490	平嶋遺跡	山田　平嶋	弥生～古代	集落		弥生現場の発掘、平成11年度調査
361-059	年の神	野口　平	弥生後期	包蔵地		墓塚、住居跡、貝塚、年の神西平遺跡、年の神遺跡
361-064	年の神北荒投群	野口　北平	弥生	埋葬		合口甕棺複数基
361-065	年の神要塚群（A）	野口　早馬	弥生中期	埋葬		大型土器
361-066	年の神要塚群（B）	野口　早馬	弥生	埋葬		3個接合を中心とする
361-067	塚原石盃土器群	野口　塚原	弥生	埋葬		石盃土、2基出土した
361-054	下前原	下前原　並林	弥生	包蔵地		昭和30年発掘調査、鉄器を多つ
361-055	塚原箱式石棺群	野口　塚原	弥生	埋葬		弥生土器・須恵器少量
361-060	北尾崎	野口　北尾崎	弥生	包蔵地		弥生砲開土器・貯蔵穴上、A・B区
361-062	舞殿東	野口　舞殿	弥生	包蔵地		弥生土器片の1部出土
362-001	大蘭貝塚	大蘭　大蘭	弥生	貝塚		弥生土器・石斧
362-006	外平貝塚	梁島　外平	弥生～中世	貝塚		土器・土師器
363-001	野部田	野部田　前田・平	弥生	包蔵地		弥生、住居・墓塚
363-002	竹崎貝塚	竹崎　山崎	縄文・弥生	貝塚		阿高式土器・石斧・石錘・石鏃
363-005	竹崎	竹崎　本村屋敷	弥生	埋葬		箱埋設有建

※周辺主要遺跡分布図及び周辺遺跡地名表については、平成10年発行の「熊本県遺跡地図」（熊本県教育委員会）と同様の番号を付した。市町村コードにあたる3桁の数字に対応する番号付は以下の通りである。

206―玉名市、361―玉名郡岱明町、362―同郡鹿島町、363―同郡天水町

第２節　歴史的環境

１　旧石器時代

玉名市内では確認されていない。玉名郡内では岱明町年の神遺跡、菊水町西中原遺跡などでナイフ形石器等が確認されている。いずれも表面採集資料である。

２　縄文時代

有明海沿岸に沿って、微高地や台地の縁辺部などには繁根木貝塚・保田木貝塚・桃田貝塚・片諏訪貝塚など多くの貝塚が分布しており、当時の海岸線が内陸のほうに入りこんでいた様子をうかがうことができる。貝塚に含まれる土器は前期から後・晩期のものまでさまざまである。

３　弥生時代

玉名市周辺の弥生時代の遺跡は菊水町の丘陵性台地から玉名平野にかかる菊池川右岸、金峰山の北麓から続く伊倉の丘陵性台地、そして小岱山の南麓に続く玉名台地の縁辺に集中する傾向が見られる。同様の立地で甕棺群や箱式石棺、支石墓などの埋葬地も多く確認されている。

菊池川河口付近の台地縁辺部に所在する天水町斎藤山貝塚では弥生時代初頭の鉄斧が出土している。同町野部田遺跡から出土した土器は、野部田式土器として弥生時代後期後半の標式土器の一つになっている。

また菊池川中流域には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての環濠集落である山鹿市方保田東原遺跡や、同じく弥生時代後期の環濠集落である菊池郡七城町うてな遺跡などがある。

玉名市内の遺跡としては木製短甲の部品等、多量の木製品が出土した柳町遺跡が、また本遺跡から北方に続く台地上には土器の散布状況から集落の存在が予想されている高岡原遺跡などがある。

なお今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡11棟を検出した。

４　古墳時代

菊池川流域で大きな特色となっているのが古墳時代である。菊池川流域は舟形石棺の分布密度が全国でもっとも高い地域であり、装飾古墳については全国で知られる484例のうちその４割にあたる186基が県内に、うち６割以上が菊池川流域に分布している。

市の北部から菊池川中流域にかけては凝灰岩を掘りこんだ横穴や横穴式石室を有する古墳が多く存在する。玉名市大坊古墳、永安寺東・西古墳、石貫ナギノ横穴群、石貫穴観音横穴群等はいずれも装飾を有し、国指定となっている。また前方後円墳・円墳なども数多く築造され、玉名郡菊水町江田船山古墳など著名な古墳も多い。

５　古代

律令制下において、小岱山南東麓から続く玉名市立願寺は日置氏を郡司とする玉名郡衙が置かれていたところである。寺院、郡家、郡倉等の発掘調査がなされており、各施設で存続時期は異なるが、全体的には７世紀末から９世紀末にかけての時期と推定されている。また同市の東に接する玉名郡玉東町には山本郡の郡寺に比定されている稲佐廃寺がある。

本遺跡の西約500mの所には南大門遺跡・南大門窯跡がある。本遺跡からは古代のものと思われる土坑が３基検出され、遺物としては溝に流れ込んだ状態で布目瓦が１点出土している。

また、菊池川が玉名平野に入り東に大きく蛇行する右岸の平野部には条里制の遺構も見られる。

古代から中世にかけては小岱山地を中心とした地域に30箇所以上の製鉄遺跡が分布することも特記しておきたい。

６　中・近世

菊池川河口の高瀬は中世のころは高瀬津とよばれ、対外貿易の拠点の一つとして栄えた。現在でも青磁片など貿易陶磁を採集することができる。近世には高瀬支藩が置かれ、五ヶ町の一つとして町奉行が置かれるなど他の在町とは異なる扱いを受けた。

遺跡の所在する玉名市山田字平嶋は旧山田村に属し、中世には集落としての形態が整ったとされる。

日吉神社の参道の両側に氏子の集落が広がっており、古い集落形態を残している。

第３節　遺跡の層位と包含層

第Ⅰ章で述べたとおり、当該地は削平と盛土により原地形をとどめているところが極めて限られていた。撹乱土を除去すると、調査区の東側ではピンポン玉大の礫をふくむ赤みを帯びたやや粘性の強い層が、中央から西にかけては褐色を帯びたやや粘性の強い層が現れた。粘性は下位になるにつれ強まる傾向がある。

Ⅰ層　整地層。

Ⅱ層　撹乱。

Ⅲ層　褐色土。
砂粒がまじる。やや粘性あり。

Ⅳ層　暗褐色土。
砂粒がまじる。やや粘性あり。

Ⅴ層　暗褐色土。
Ⅳ層より粘性強い。この上面が遺構検出面。

Ⅵ層　暗褐色土。
Ⅴ層より色調は黄色みを帯び、粘性も強まる。

Ⅶ層　黄白灰色土。
粘性強い。マンガン含む。

Ⅷ層　暗赤褐色土。
粘性強い。マンガン含む。

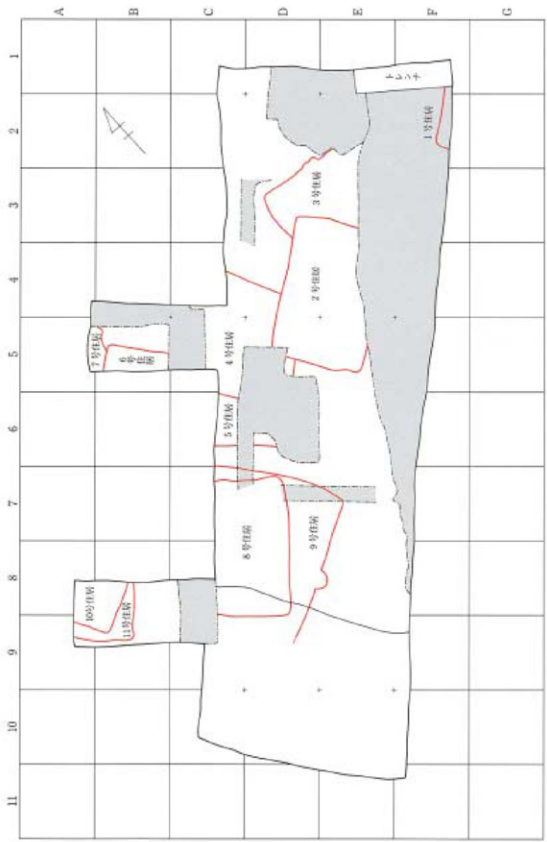
第　4　図　　土　層　模　式　図

第３節　遺跡の層位と包含層

＜第Ⅱ章　参考文献＞

1　熊本県教育委員会「熊本県遺跡地図」平成10年
2　熊本県教育委員会「熊本県文化財調査報告第81集　熊本県旧石器時代調査報告」昭和61年
3　熊本県教育委員会「熊本県文化財整備報告第３集　肥後古代の森」平成７年
4　玉名市・秘書企画課「玉名市歴史資料集成第12集　玉名郡衙」平成６年
5　熊本県教育委員会「熊本県文化財調査報告第31集　菊池川流域文化財調査報告」昭和53年
6　保存科学研究会東京支部「史跡大坊古墳保存工事報告書」熊本県玉名市教育委員会、1979年
7　荒尾市史編集委員会「荒尾市史」荒尾市、平成12年
8　玉名市史編集委員会「玉名市史　資料篇２　地誌」玉名市、平成４年
9　玉名市史編集委員会「玉名市史　資料篇３　自然・民俗」玉名市、平成５年
10　南関町史編集委員会「南関町史　資料」南関町、平成９年
11　玉東町史編集委員会「玉東町史　通史編」玉東町、平成７年
12　「郷土資料事典43　熊本県」株式会社ゼンリン、1998年
13　「日本歴史地名大系44　熊本県の地名」平凡社、1985年
14　田添夏喜・玉名市文化財保護委員会「文化財めぐり」玉名市史編集委員会、昭和60年
15　「横島干拓入植―しあわせを求めて」横島干拓入植20年記念誌編集委員会、平成５年

ほか



第５図　竪穴住居跡全体配置図

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構としては竪穴住居跡11棟を検出した。以下順に述べていくことにする。なお法量等の数値や文中で使用する用語などについては第２表「平鳴遺跡竪穴住居跡一覧表」にまとめた。また、遺物のレイアウトは基本的に出土地点が下位の層から上位の層へとなるように並べることとした。完形の遺物（土器）はほとんど出土していない。大部分の土器は磨滅の度合いが激しく、調整が観察できないものも多かった。

１号竪穴住居跡（第６図）

調査区東隅に位置する。大部分が調査区外のため詳細は不明であるが、調査区壁にかかった断面の規模から住居跡と判断した。平面形式は方形である。

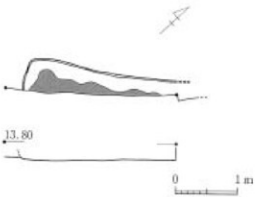
遺構は表土はぎ直後に検出した。ほとんど床面しか残っていない状況であったが、炭化物の広がりが確認できた。ピットは検出していない。

土器の胴部片が数点出土したが、いずれも磨滅していた。

２号竪穴住居跡（第７・８図）

調査区の東よりに位置する。東側は削平されていたが、かろうじて床面は確認できた。平面形式は長方形で、短辺に沿って両側にベッド状遺構が配される。残存する壁高は約30cm、床面とベッド部の比高差は約20cm である。主柱本数は２本と思われる。

ベッド部は粗掘りした後盛土で成形される。東側ベッド部の北側には流れ込みの状態で炭化物が集中していた。溝状遺構は床面とベッド部の境を切れ切れにめぐる。深さは約２～４cm である。中央ピットはおよそ径50cm×深さ10cm の円形、貯蔵穴は長径45cm ×短径33cm ×深さ20cm の楕円形である。ともに埋土は極暗褐色土で、炭化物（１～２cm）・焼土を含む。



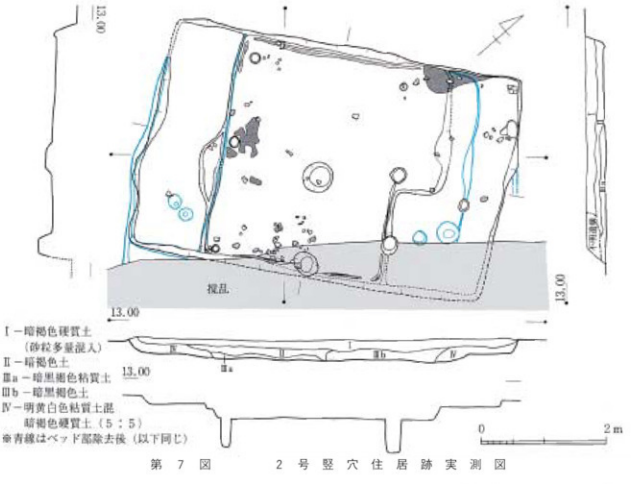
第６図　　１号竪穴住居跡実測図

１・２・４は床面直上（以下床直）で出土した土器である。１は甕で、口縁端部は欠損する。磨滅するが一部に黒斑がある。２は甕の脚台である。端部は磨滅するが、内外面にハケメ調整が観察される。３は高坏脚柱の裾部である。磨滅のため調整は不明である。４は高坏の口縁部である。磨滅のため調整は不明である。５～10は１層および一括取り上げの土器である。５は小型壺の口縁部である。非常にもろく、剥落が激しい。６は高坏の口縁部である。同様の形態の口縁部片が床直でも出土している。７は２層から出土した甕の脚部である。内面にうすくハケメ調整が残る。８はジョッキ型土器と思われる土器の底部である。丁寧に成形されており、他の土器とは胎土・焼成・調整などが異なる印象を受ける。９・10は甕の口縁部である。いずれも磨滅が激しいため調整は不明である。

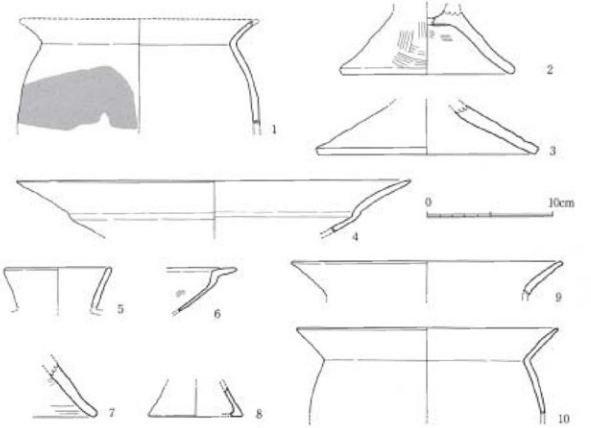
３号竪穴住居跡（第９・10図）

調査区の東よりに位置する。北側上部および東側は削平されており、南側は２号竪穴住居にきられているため規模は不明である。また住居内の一部は２号土坑にきられる。平面形式は長方形になると思われ、西壁に沿ってベッド状遺構が残り北東隅にもベッド状の高まりが確認される。残存する壁高は約23cm、床面とベッド部の比高差は約23cm である。主柱本数は２本と思われる。

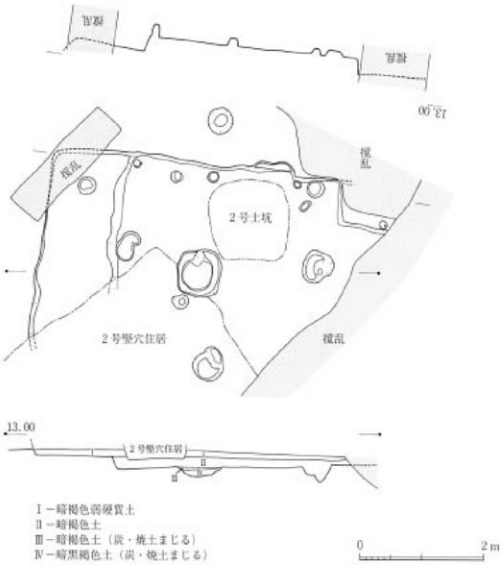
ベッド部は地山を掘りこんで形成される。溝状遺構は確認できない。中央ピットはおよそ70cm 四方



第 7 図　　2 号 竪 穴 住 居 跡 実 測 図



第 8 図　　2 号 竪 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図



第９図　　３号竪穴住居跡実測図

第10図　　３号竪穴住居跡出土遺物実測図

×深さ14cmの方形、貯蔵穴はおよそ径58cm×深さ15cmの不整円形である。ともに埋土は暗褐色土で、炭化物・焼土を含む。

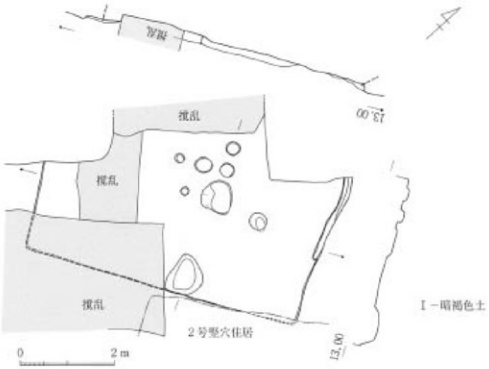
１は１層から出土した甕の口縁部である。磨滅が激しい。２は３層から出土した甕の脚部である。上部に接合面が観察できる。大部分は磨滅するが、内部にうすくハケメ調整が残る。

４号竪穴住居跡（第11・12・13・14図）

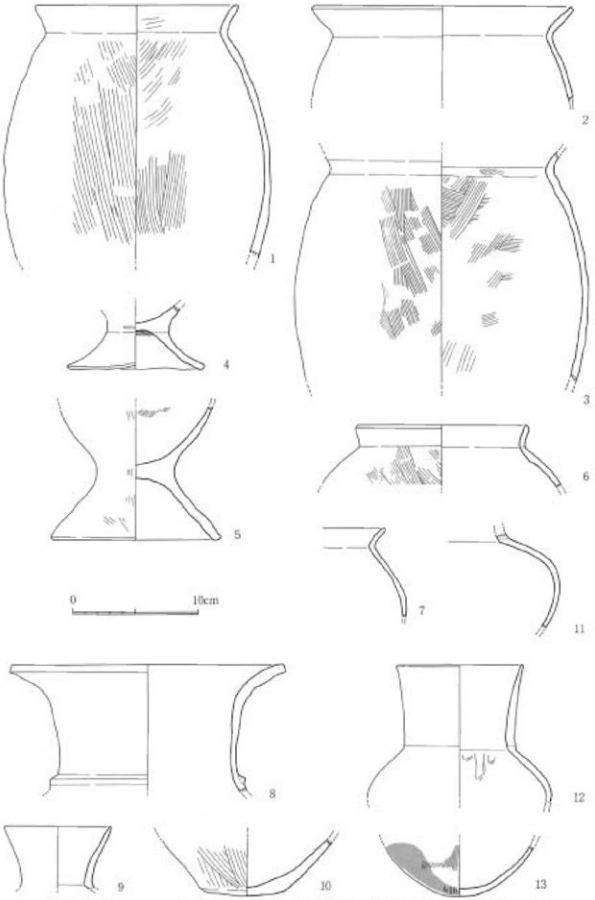
調査区のほぼ中央に位置する。北側及び西側は調査区外にかかり、北西部及び南側は撹乱を受けているため規模は不明である。また東側の一部は２号竪穴住居にきられる。平面形式は長方形と思われ、残存する壁高は約10cmである。ベッド状遺構の有無・主柱本数は共に不明である。

溝状遺構は東壁に沿って検出された。溝は途中で切れており、深さは約３cmである。検出した床面

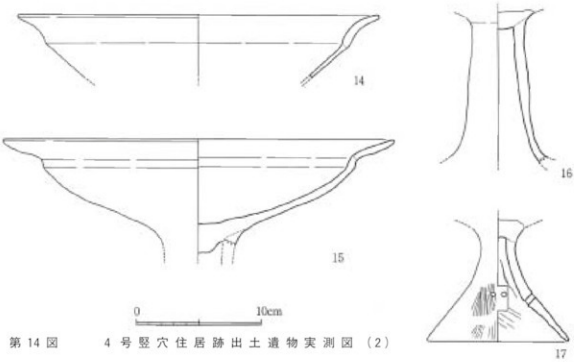
第 11 図　　4 号 竪 穴 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況



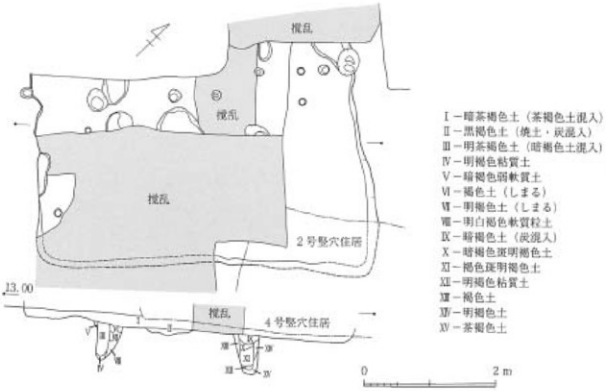
第 12 図　　4 号 竪 穴 住 居 跡 実 測 図



第 13 図　4 号 竪 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図 （1）

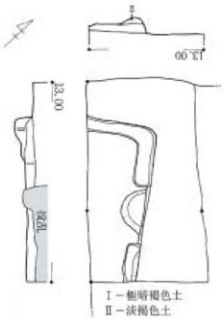


第 14 図　　4 号 竪 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図 （2）



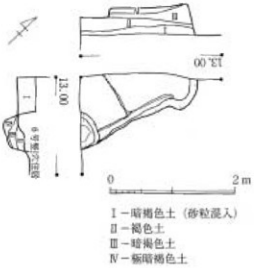
第 15 図　　5 号 竪 穴 住 居 跡 実 測 図

第 16 図　　5 号 竪 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図

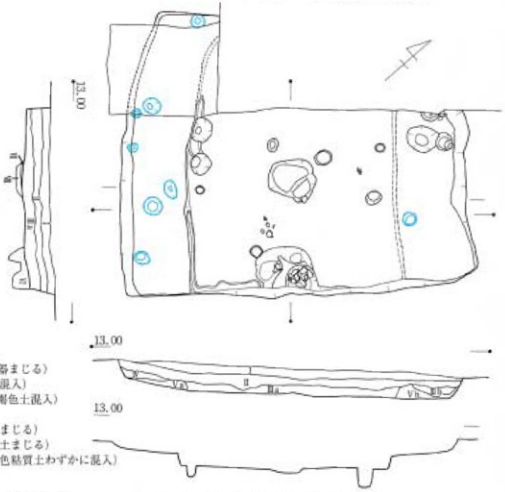


第17図　　6号竪穴住居跡実測図

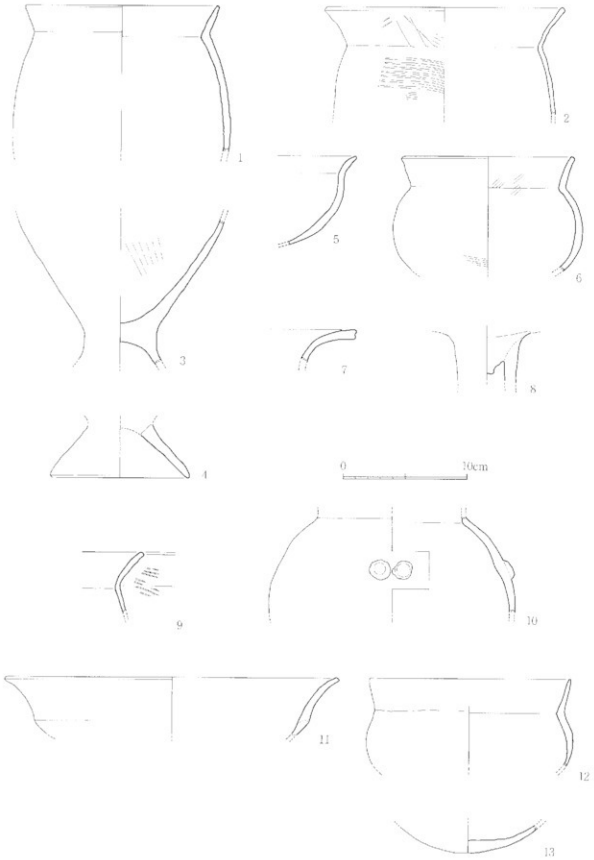
第18図　　6号竪穴住居跡出土遺物実測図



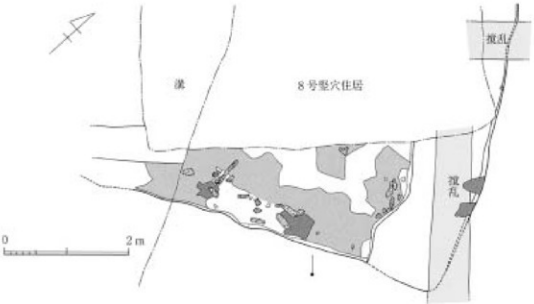
第19図　　7号竪穴住居跡実測図



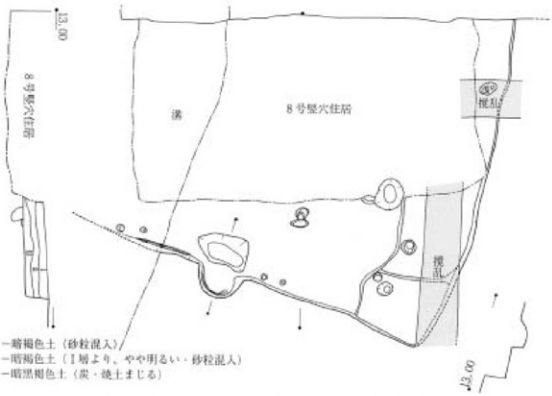
第 20 図　　8 号 竪 穴 住 居 跡 実 測 図



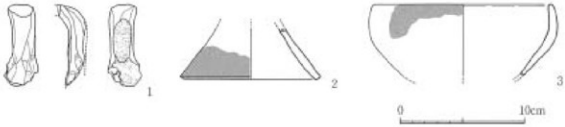
第 21 図　　8 号 竪 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図



第 22 図　　9 号 竪 穴 住 居 跡 炭 化 物 ・ 焼 土 分 布 図

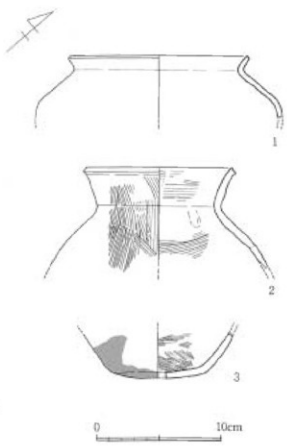


第 23 図　　9 号 竪 穴 住 居 跡 実 測 図



第 24 図　　9 号 竪 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図

第25図　10・11号竪穴住居跡実測図



第26図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図

積を２号竪穴住居跡と比較してみると、この溝のさらに東側にベッド状遺構が続く可能性もある。中央ピットはおよそ径50cm ×深さ５cm の不整円形で、炭化物及び焼土を多量に含む極暗褐色土を埋土とする。貯蔵穴はおよそ径63cm ×深さ24cm の不整円形で、炭化物を含む暗褐色土を埋土とする。

４号竪穴住居跡の上層部は撹乱を受けており、残存する覆土の厚みが10cm と浅いことから、遺物は一括して扱った。１～５は甕である。１は全体的に磨滅するが、内外面に縦方向のハケメ調整が残る。２は磨滅が激しいため調整は不明である。３は不定方向のハケメ調整が残る。口縁端部は欠損する。４・５は脚である。４は接合面が観察でき、５は磨滅するが一部ハケメ調整が残る。６・７は鉢である。７はピットから出土したものである。８は今回の出土遺物の中では比較的大型の壺で、頸部に突帯がめぐる。９は壺の底部と思われる。底面は若干凸状を呈し、外面は縦方向のハケメが残る。10～13は壺である。10は内面の頸部直下に持ち上げ痕らしき圧痕がある。11・12はともに口縁が真っ直ぐ立ち上がる。11の胴部内面には縦方向の指なで痕が観察でき、12の下部には接合面が見られる。13は鉢の底部と思われる。丸底で外面に黒斑があり、内底面に指頭圧痕がある。14～17は高坏である。14・15は坏部である。14は磨滅のため調整は不明であるが、脚部との接合部が観察できる。15も同じく磨滅のため調整は不明である。16は脚柱で、裾部は欠損する。上部に接合面が観察でき、内面上部はスス状の黒色がつく。17は脚台である。上部に接合面がある。中央に外面上方から内面下方に向けて、穿孔が２つ並んでいるが、４方向につくものかどうかは不明である。

４号竪穴住居跡は表土はぎの時点から多量の土器が出土しており、今回の調査においても最も多くの土器が出土した住居跡である。器種も多用であり破

片が多いことから出土した土器の大半は廃棄されたものと思われる。

５号竪穴住居跡（第15・16図）

調査区のほぼ中央に位置する。南側は床面積の約半分が削平され、西側は調査区外にかかる。上部も撹乱を受け、北側上部は４号竪穴住居にきられる。平面形式は長方形になると思われる。残存する壁高は約10cmで、主柱本数は２本と思われる。

ベッド状遺構および溝状遺構の有無は不明である。中央ピットはおよそ径70cm×深さ５cmで、平面形態は不明である。埋土は極暗褐色土で、炭化物・焼土を含む。貯蔵穴の有無は不明である。

１は床直出土の鉢である。磨滅が激しく、２mm前後の砂粒が全体に浮く。外面の一部に黒斑が認められる。

６号竪穴住居跡（第17・18図）

調査区の北西部に位置する。東側と上部は撹乱を受け、床面の大部分は調査区外にかかるため規模は不明である。平面形式は方形または長方形で、残存する壁高は約10cmである。主柱本数は不明である。

ベッド状遺構、中央ピットおよび貯蔵穴の有無は不明である。溝状遺構は壁に沿って検出された。幅は約20cm、深さは約５cmである。

１は１層から出土した甕の口縁部である。磨滅が激しいため調整は不明であるが、形状や胎土の様子から、他の住居跡出土土器と同時期のものと思われる。他に甕の脚部や高坏などの土器片が出土している。

７号竪穴住居跡（第19図）

調査区の北西隅に位置する。大部分が調査区外にかかるため規模は不明である。住居内の一部は６号竪穴住居にきられる。平面形式は方形または長方形になると思われる。残存する壁高は約40cmで、主柱本数は不明である。

ベッド状遺構、中央ピットおよび貯蔵穴の有無は不明である。溝状遺構は壁に沿って検出された。幅は約10cm、深さは約２～７cmである。

数点の土器片が出土したがいずれも小片で図化にはいたらなかった。

８号竪穴住居跡（第20・21図）

調査区の南西部に位置する。北西部は調査区外にかかり、南西部は撹乱を受ける。また南側上層部は溝（第３章第３節）にきられる。平面形式は長方形で、短辺に沿って両側にベッド状遺構が配される。残存する壁高は約30cm、床面とベッド部の比高差は約16～20cmである。主柱本数は２本と思われる。

ベッド部は粗掘りした後盛り土で成形される。溝状遺構は南西から南東にかけてＬ字状に床面とベッド部の境に配され貯蔵穴と接する。深さは約３～７cmである。中央ピットはおよそ径77cm×深さ11cmの円形である。貯蔵穴は長径82cm×短径65cm×深さ16cmの楕円形で南東壁に接する。ともに埋土は暗褐色土で、炭化物・焼土を含む。

１～８は床直出土の土器である。１は甕の口縁部から胴部にかけての破片であるが、磨滅が激しいため調整は不明である。２も同じく甕の口縁部である。比較的器壁が薄く、外面にタタキ痕が残る。３は甕の底部で脚端部は欠損する。磨滅しているが内面にハケメ調整がうすく残る。４は甕の脚台である。上部に接合面が観察できる。５・６は鉢である。６は、色調は他の土器と変わらないが、焼成は良好で胎土は土師器のようなきめ細かさがある。磨滅しているが、うすくハケメ調整の痕跡が確認できる。７は壺の口縁部である。８は高坏の脚柱である。坏部との接合部で、上部に接合面が観察される。９・10は１層出土の土器である。９は壺で、肩部に円形浮文が２つ貼りついた胴部であるが、浮文が４面に付けられるのかどうかは不明である。10は甕の口縁部である。器壁が比較的薄く、外面にタタキ痕が認められる。11は２層出土の高坏口縁部である。12・13は３層出土の土器である。12は鉢形土器の口縁部で、13は壺の底部と思われる。他の住居跡と比べると遺物の出土量は多く、頸部に突帯を持つ壺の一部などを含めおよそコンテナ５箱分の遺物が出土した。なお、床面から浮いた状態で、石皿が１点出土している。

9号竪穴住居跡（第22・23・24図）

調査区の南西部に位置する。西側は８号竪穴住居に、南側上層部は溝にきられる。平面形式は長方形と思われ、北壁に沿ってベッド状遺構が配されるが南側は不明である。残存する壁高は約36cm、床面とベッド部の比高差は約15～20cm である。主柱本数は不明である。

ベッド部は地山を掘りこんで造られ、東隅のおよそ１m四方を残して段がつくように設置される。溝状遺構は南東壁に沿って配され、貯蔵穴より先（東方向）には続かない。深さは約２～４cm である。中央ピットの有無は不明である。貯蔵穴は長径84cm ×短径50cm ×深さ18cm の楕円形で、貯蔵穴に近い南東壁は半円状に突出する。埋土は極暗褐色土で、炭化物・焼土を含む。

９号竪穴住居跡では表土はぎを終え掘り下げにかかった直後から多量の炭化物が出土し始めた。部分的には炭塊も確認でき、炭化物・焼土が住居内の広範囲にわたって確認されたため焼失家屋と推察したが、建築部材の単位などは復元できなかった。

１は床直で出土したジョッキ型土器の把手である。体部は見つかっていない。２号住居跡から出土したものとは異なり、成形は荒削りで胎土・焼成等は他の土器と同様である。２はトレンチから出土した甕の脚台である。調整は磨滅により不明であるが、端部に黒斑が残る。３は３層から出土した鉢である。特に下部の磨滅が激しい。口縁部の一部に黒斑がある。９号竪穴住居跡からはコンテナ１箱分の土器片が出土したがほとんどが胴部片であり、図化できるものは少なかった。

10号竪穴住居跡（第25・26図）

調査区の南西部に位置する。床面積の大部分は調査区外にかかるため、規模は不明である。また、上部は溝にきられる。平面形式は方形または長方形と思われ、南壁に沿ってベッド状遺構が配される。残存する壁高は約40cm、床面とベッド部の比高差は約８～18cm である。主柱本数は不明である。

ベッド部は地山を掘りこんで成形される。溝状遺構は壁に沿って設置され幅約10～15cm、深さ約２～４cm である。中央ピット、貯蔵穴の有無は不明であるが、遺構内北隅でピット状のくぼみを検出している。その東側に、調査区外に広がるかたちで炭化物が広がる箇所が確認された。床面からは10cm ほど浮いた状態である。またその下に床面が赤く変色した箇所（地山は灰白色粘質土）が同様に広がっていたが、範囲は微妙に異なる。炭化物は流れ込みに寄るものと思われる。

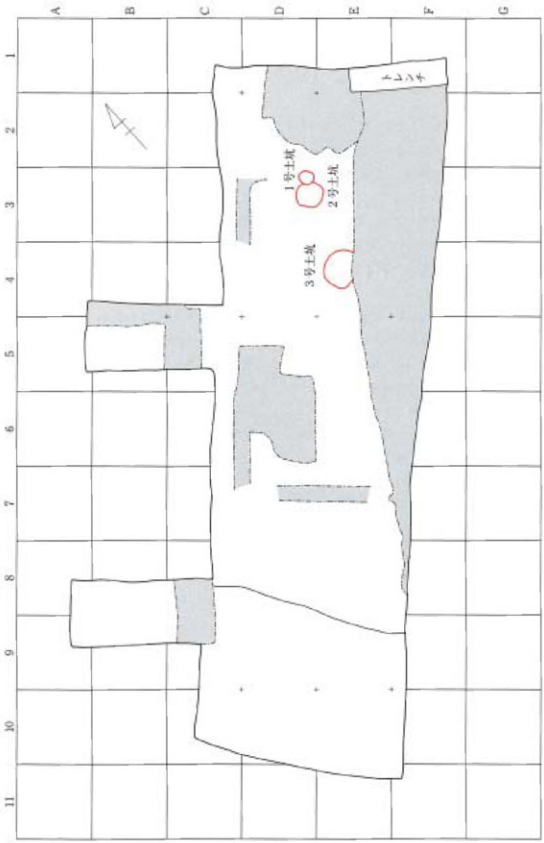
１～３は床直で出土したものである。１は鉢の口縁部で、赤褐色を呈し、もろくて崩れやすい。２は壺の口縁部で、頸下内面に持ち手のあとと見られる指頭圧痕がある。３は壺の底部である。胎土・色調は２の口縁部と似る。外面に一部黒斑がある。

11号竪穴住居跡（第25図）

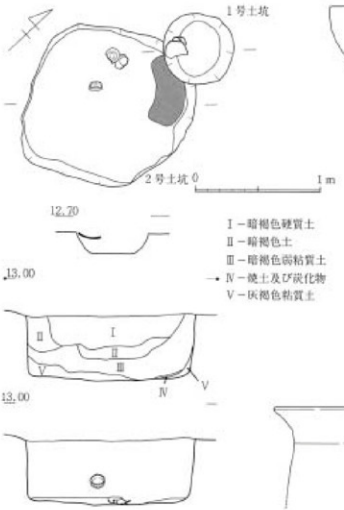
調査区の南西部に位置する。大部分は調査区外にかかり、上部は10号竪穴住居にきられているため規模は不明である。床面は削平され残っていないが、溝状遺構とピットはかろうじて確認できる。平面形式は方形または長方形で、ベッド状遺構の有無は不明であるが、遺構の西辺から１m ほどの距離に、辺に平行して溝のような痕跡がわずかに認められたことからベッド部があった可能性もある。主柱本数は不明である。

溝状遺構は幅８～16cm 深さ１～３cm である。中央ピット・貯蔵穴の有無は不明であるが、南隅に径およそ55cm のピットがある。

土器片が１、２点出土したがいずれも磨滅していた。

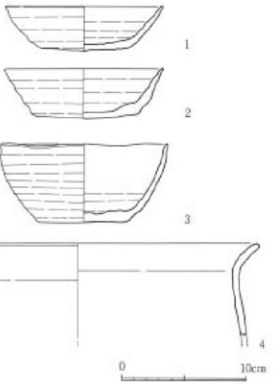


第 27 図　土坑全体配置図

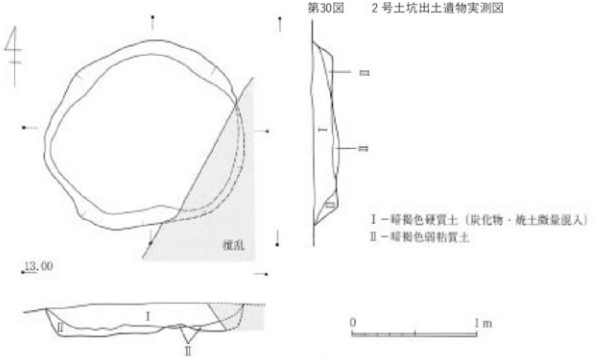


第28図　1・2号土坑実測図

第29図　1号土坑出土遺物実測図

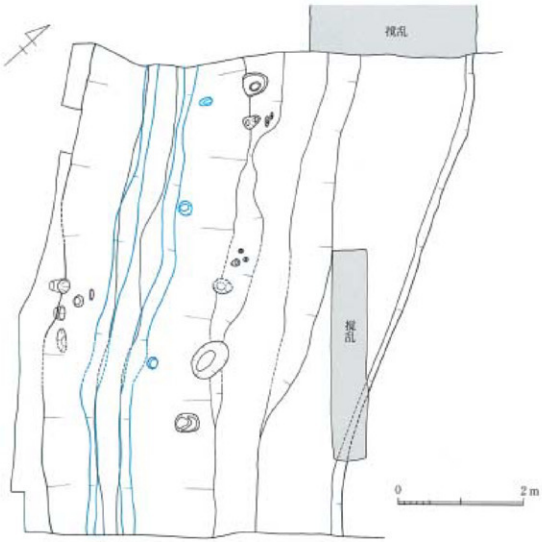


第30図　2号土坑出土遺物実測図



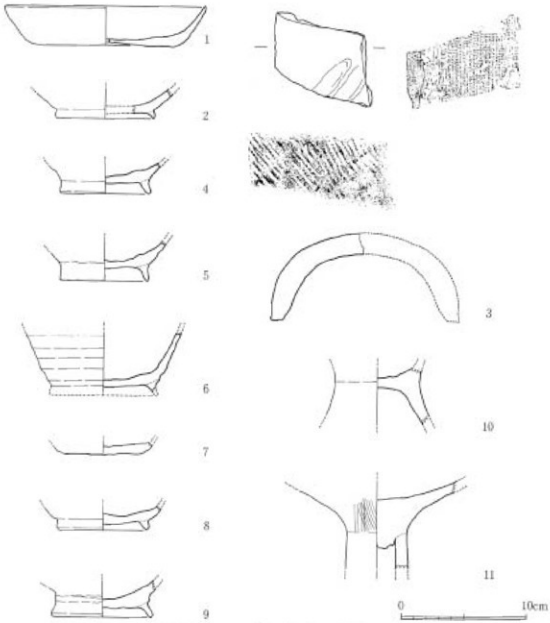
第31図　3号土坑実測図

第32図　溝・不明遺構・ピット全体配置図

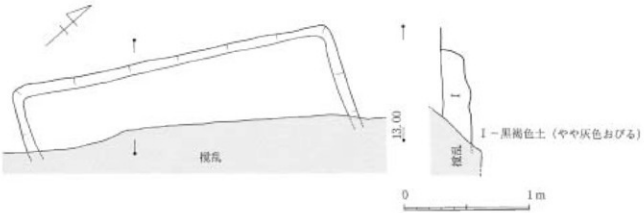


※青は第２面の下端

第 33 図　　溝 実 測 図



第 34 図　　溝 出 土 遺 物 実 測 図



第 35 図　　不 明 遺 構 実 測 図

第２節　古代の遺構と遺物

古代の遺構として、土坑３基を検出した。古代の遺物を伴っていないものでも、検出状況から時期を判断したものも含めている。

１号土坑（第28図）

調査区北東部に位置する。平面形式は円形で、およそ径57cm×深さ17cmである。埋土は極暗褐色粘質土で５mm前後のレキを含む。

１は遺構の検出と同時に出土したもので、鉢の口縁部である。１号土坑は２号土坑をきっており、２号土坑は古代の遺物を伴うことから１号土坑はそれ以降の時代となる。しかし１は弥生時代の土器と思われるため、１号土坑に伴うものではないが参考資料として図化することにした。そのほか同じく弥生時代のものと思われる壺の胴部片も少量出土している。

２号土坑（第28図）

調査区北東部に位置する。北側上部は１号土坑にきられる。平面形式は円形で、およそ径130cm×深さ56cmである。土坑はほぼ垂直に掘りこまれ、埋土は暗褐色土を主とする。最下層の北東部には炭化物と焼土が集中する。

１・２は最下層から出土した須恵器坏である。ともに破損（欠損）した状態で出土した。軟質で磨滅が激しい。２は右回りの回転ロクロによる成形である。３は３層から出土した須恵器鉢である。１・２と異なり、硬質で焼成は良好である。左回りのロクロ成形・回転ヘラ切りで、口縁付近は焼成時の被熱によりゆがみが生じている。部分的に自然釉がかかり、全体的に赤みのある発色となっている。４は１層から出土した甕である。流れ込みによるものと思われ、磨滅が激しく調整は不明である。

３号土坑（第31図）

調査区のやや東よりに位置する。上部および南東部は削平される。平面形式は円形で、およそ径155cm×深さ25cmである。埋土は暗褐色土を主とし、２層に分けられる。遺物は流れ込みによる弥生土器が数点出土したものの、土師器や須恵器等は出土しなかった。しかし、弥生時代の遺構である２号竪穴住居跡をきっていることと、形態が２号土坑と類似することから２号土坑と同じく古代の遺構としてとりあつかったものである。

第３節　その他の遺構と遺物

１　溝について（第33・34図）

調査区の南辺に沿って溝が検出された。主軸はほぼ北西―南東にのる。検出時の幅は調査区壁から約6.2mをはかった。遺物の出土状況等から２面に分けられる。

第１面

南西部が調査区外にかかるため幅は不明であるが、傾斜から推測する幅は７mを越える。深さと幅を比べると、浅く幅広の様相を呈する。上部は褐色土、下部は暗褐色土を主とし、下層は少量の炭化物を含む。上層から中層にかけては弥生土器のほか土師器、須恵器、青磁などが含まれ、下層では土師器や須恵器の出土が多くなる。検出面からの深さ約1.5mのところで須恵器を主とする数点の遺物が点々と出土し、その面を溝の底面と判断した。

１・２は９層から出土した土師器の坏である。１は磨滅が激しく、調整は不明である。２は坏の底部で、外面と高台内面の横ナデがわずかに観察できる。３～11は10～11層から出土したものである。３～８は11層から出土した土師器の坏の底部である。磨滅しているが全てヘラ切り痕が観察される。５は体部から底部に至る部位であるが口縁・高台端部を欠損する。９は丸瓦である。外面は平行タタキ文、内面は布目痕が残る。内面端部は面取りされる。10・11は弥生土器である。10は内面に指頭圧痕のある甕の脚台である。端部は欠損する。11は高坏の坏部と脚柱の接合部である。外面のハケメ調整がうすく残る。なお、上層から石鏃が１点出土している。

第２面

第１面の完掘後、確認のためにトレンチ（試掘坑）を入れてみたところ、堆積土が下方へＶ字状に存在することがわかった。検出面から底面までの深さは約２ｍである。上部は溝の第１面にきられる形となっており、第１面と第２面の接点に屈曲部がある。最下部から屈曲部までの角度は約60度、屈曲部から溝の端までの角度は約15度である。角度を考慮すると、本来の幅は４ｍ前後かそれ以上になるものと推測される。水平堆積する第１面とは異なり、粘性の強い層とシルト質の層が交互に堆積する様相を見せる。遺物は１点も出土しなかった。

２　ピット状遺構について（第32図）

第２節で述べた土坑を検出した面と同じ面でピットを検出した。規則的な配列は明確でないため、ピット状遺構として一括して掲載することにしたものである。

うち１基のピットから弥生時代の甕の脚台が出土したが、住居跡出土遺物と同等の時期の土器と見られることからピットの掘削に伴う落ち込みの土器と判断した。

土坑との切り合いは不明だが、弥生時代の住居跡をきっていること、前述の中世の遺物を含む溝の上にはピットは存在しないこと、また包含層中にも古墳時代の遺物は含まれないことなどから、ピット状遺構の時期はおよそ古代と推測される。

３　不明遺構について（第35図）

２号住居跡のほぼ中央上面におさまる。北側を２号土坑にきられる。平面形式は方形で、長軸262cm×短軸52cm×深さ21cmを測る。当初２号住居の堆積土と認識していたが、平・断面の様相から遺構と判断した。

遺物は数点出土したが、いずれも磨滅した弥生土器片であった。時期は不明である。

第 2 表　　平 嶋 遺 跡 竪 穴 住 居 跡 一 覧 表

掲載番号	実測時の番号	平面形式	床面積の残存率(%)	主軸の方位	床面の標高(m)	主柱穴の有無	法量（m）			付帯施設				備　考
							長軸	短軸	壁高	ベッド	中央ピット	貯蔵穴	溝	
1号	S003	方形または長方形	—	N-40°-E	12.53	不明	2.43～	0.52～	(0.03)	不明	不明	不明	不明	・上部は大幅に削平を受ける。また遺構の大部分が調査区外にかかる。
2号	S042	長方形	97	N-38°-E	12.39	2本柱	5.86	3.78	0.30	あり	あり	あり	あり	・東側ベッド部の北隅および西側ベッド部の中央付近に炭化物の集中箇所あり。
3号	S082	方形または長方形	36	N-84°-E N-6°-W	12.53	不明	6.00～	5.00～	(0.23)	あり	あり	不明	不明	・上部は大幅に削平を受ける。遺構の南側は2号住居、東側は撹乱のため検出不能。
4号	S057	方形または長方形	50	N-24°-E	12.65	不明	4.70	3.16～	(0.10)	不明	あり	あり	あり	・上部は大幅に削平を受ける。 ・土器が大量に出土。廃棄されたものか？
5号	S087	方形または長方形	36	N-46°-E	12.60	2本柱	5.16	3.56～	(0.10)	不明	あり	不明	不明	・上部は大幅に削平を受ける。また遺構の北～西、南の部分は撹乱により破壊される。
6号	S043	方形または長方形	—	N-38°-E N-52°-W	12.55	不明	2.00～	1.20～	(0.10)	不明	不明	あり？	あり	・大部分が調査区外にかかる。
7号	S045	方形または長方形	—	N-74°-E N-16°-W	12.22	不明	2.10～	0.96～	(0.15)	あり？	不明	不明	あり	・調査区北壁付近にかかる突出部は9号住居のものと同種のものか？
8号	S044	長方形	76	N-48°-E	12.25	2本柱？	5.52	3.00～	0.35	あり	あり	あり	あり	・ベッド部は東西とも盛土で成形される。
9号	S048	方形または長方形	19	N-30°-E	12.53	不明	5.53～	3.00～	0.37	あり	不明	あり	あり	・南壁の中央付近に半円状の突出部あり。 ・焼失家屋の可能性あり。
10号	S047	方形または長方形	23	N-48°-E	12.12	不明	2.52～	2.28～	0.42	不明	不明	不明	あり	・炭化物・焼土が検出されたが範囲は異なる。炭化物は若干浮いた状態で出土。
11号	S059	方形または長方形	20	N-27°-E N-63°-W	12.22～	不明	2.16～	1.82～	不明	不明	不明	不明	あり	・溝状遺構のみ残存。上部は10号住居により削平される。

（註）1　「床面積の残存率」については、中央ピットの位置やベッド状遺構の残存の様子などから大まかに推定面積を算出し、計算した。
　　推定面積が算出できないものについては‘－’を付した。
　　2　「主軸の方位」は基本的に中央ピットと貯蔵穴を結んだ線を用いて計測したが、向きを判断しかねるものについては2つ記載することとした。
　　3　「床面の標高」および「法量」について、‘～’となっているのはその直前の数字が残存する値であることを示す。
　　4　「付帯施設」について、「ベッド」、「中央ピット」、「貯蔵穴」および「溝」は以下の意味で使用している。
　　「ベッド」＝「ベッド状遺構」　竪穴側壁面に沿って、床面より一段高く造る土壇状の遺構。
　　「貯蔵穴」　竪穴壁面に接して設ける穴について便宜上用いている。ただし貯蔵の機能があったものかどうかは断言できない。
　　「中央ピット」　床面の中央にある（と思われる）穴。炭化物や焼土を含むが床面の焼けた痕跡はない。
　　「溝」＝「溝状遺構」　床面の乾燥を保つための溝と思われる。

（参考）宮本長二郎「日本原始古代の住居建築」中央公論美術出版、平成8年

第 3 表　平嶋遺跡報告書掲載土器観察表

掲載番号	調査区名	遺物番号	自上位置	時代	種別	器形	残存率	反転復元	法量 口径	底径	器高	最大径	調整 内面	外面	見込み	底部	胎土 赤色粒	白雲母	砂粒	焼成	色調	備考
8-1	D 4	2 号住居	床直	弥生	壺	頸部～体		○	(18.8)	–	8.5～	(19.2)	ナデ?	横ナデ? ハケメ?		–	△	△	○	やや不良	橙 10YR7/6	体部に黒斑アリ。
8-2	E 4	2 号住居	床直	弥生	甕	胴有	–	○	–	(13.8)	5.3～	–	横方向ハケ	ハケメ	–	–	×	◎	△	良好	橙 7.5YR6/6	
8-3	E 4	2 号住居	ピット1	弥生	高杯	脚部	–	○	–	(17.4)	4.0～	–	不明	不明	–	–	△	◎	△	良好	橙 7.5YR6/6	
8-4	B 5	2 号住居	床直	弥生	高杯	口縁部		○	(31.4)		4.2～	(31.6)	不明	不明			△	○	○	やや不良	橙 7.5YR7/6	
8-5	E 3	2 号住居	1 層	弥生	小壺	口縁部	–	○	(8.2)	–	3.3～	–	ナデ	ナデ	–	–	△	○	△	やや不良	明赤褐 5YR5/6	
8-6	E 4	2 号住居	1 層	弥生	高杯	口縁部			不明		3.5～		ハケメのち ナデ	ナデ、横ナデ			△	○	△	良好	にぶい黄橙 10YR6/4	床直出土遺物と同形
8-7	E 5	2 号住居	2 層	弥生	甕	胴有	–	–	–	不明	4.5～	–	ハケメのち ナデ	不明	–	–	×	◎	△	やや不良	橙 7.5YR6/6	
8-8	E 4	2 号住居	一括	弥生	ジョッキ型土器	底部		○		(7.4)	2.3～		横ナデ	ナデ?		ナデ	△	△	○	良好	明黄褐 10YR7/6	
8-9	D 3	2 号住居	一括	弥生	壺	口縁部	–	○	(21.4)	–	2.8～	–	不明	横ナデ	–	–	△	△	○	やや不良	橙 7.5YR7/6	
8-10	D3,4	2 号住居	一括	弥生	壺	口縁部	–	○	(20.8)	–	7.9～	–	不明	不明	–	–	○	○	△	やや不良	橙 10YR6/4	
10-1	E 2	3 号住居	一括	弥生	壺	口縁部			不明		4.1～		不明	横ナデ			×	◎	△	やや不良	橙 10YR6/4	
10-2	E 3	3 号住居	3 層	弥生	甕	胴有	–	–	–	不明	5.5～	–	ハケメ?	ナデ?	–	–	×	◎	△	やや不良	橙 7.5YR6/8	
13-1	D 5	4 号住居	下層	弥生	壺	口縁～体	1/3	○	(15.6)		20.4～	(21.2)	ハケメ(先下がり)、縦	縦方向ハケメ			○	△	△	やや不良	橙 7.5YR7/6	
13-2	C 5	4 号住居	下層	弥生	壺	口縁部	–	○	(20.7)	–	7.7～	–	ナデ?	ハケメ?	–	–	○	△	△	やや不良	橙 7.5YR7/6	
13-3	C 5	4 号住居	下層	弥生	壺	体部	1/5	○			18.6～	(23.6)	不定方向ハケメ	縦方向ハケメ			○	△	△	やや不良	にぶい黄橙 10YR6/4	部分的に欠損する。
13-4	D 5	4 号住居	下層	弥生	鉢	胴有	–	×	–	10.4	5.2～	–	ナデ、横ナデ	横ナデ	不明	ハケメ	◎	△	△	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	
13-5	C 5	4 号住居	下層	弥生	鉢、壺?	底部～胴	1/3	×	–	13.2	10.7～	–	ハケメ	ハケメ	ナデ	ナデ	◎	△	△	良好	橙 7.5YR7/6	胴部は明黄褐色。
13-6	C 5	4 号住居	下層	弥生	壺	口縁部		○	(13.6)		5.0～		不明	ハケメ(右下がり)			△	△	○	やや不良	黒褐 5YR3/2	
13-7	C 5	4 号住居	ピット2	弥生	壺	口縁～体	–	–	不明	–	7.3～	不明	不明	不明	–	–	△	△	○	やや不良	橙 5YR6/8	長頸部口縁部。頸部に突帯がつく。刻み目はない。
13-8	C4,5	4 号住居	下層	弥生	壺	口縁部	1/3	×	21.8		(10.1)		ナデ?	ナデ?			○	△	△	良好	にぶい橙 10YR7/4	
13-9	C 5	4 号住居	下層	弥生	鉢、壺、壺?	底部	–	△	–	6.6	4.4～	–	ナデ	縦方向ハケメ	ナデ	ハケのちナデ	○	△	△	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	
13-10	C 5	4 号住居	下層	弥生	小壺	口縁部		×	8.4		5.0～		不明	ナデ?			△	△	○	やや不良	橙 5YR6/6	
13-11	D 5	4 号住居	下層	弥生	小壺	体部	–	–	–	–	7.7～	不明	ナデ	ハケメのち横ナデ	–	–	○	△	△	良好	明黄褐 10YR7/6	外面に黒斑あり。
13-12	C 5	4 号住居	下層	弥生	小壺	口縁～体	1/5	○	(10.0)	–	10.9～	(14.8)	ナデ、指ナデ痕アリ	ナデ	–	–	○	○	△	やや不良	橙 7.5YR6/6	口縁部にうすくハケメ残る。ただし、櫛描調整ではない。
13-13	C 5	4 号住居	下層	弥生	鉢	底部	1/3	×	–	2.6(丸)	4.1～	不明	ナデ	縦方向ハケメ	ナデ、指頭圧痕アリ	ナデ?	○	△	△	良好	橙 7.5YR7/6	外面に黒斑あり。
14-14	C 4	4 号住居	床直	弥生	高杯	口縁部	–	○	(28.8)	–	5.1～	(29.2)	不明	不明	–	–	×	◎	△	やや不良	にぶい黄橙 10YR7/4	
14-15	C 4	4 号住居	下層	弥生	高杯	坏部	1/2	△	(31.4)	–	8.5～	(31.6)	不明	不明	不明	–	○	○	△	やや不良	橙 5YR6/8	
14-16	C 4	4 号住居	下層	弥生	高杯	脚柱	1/3	×	–	–	12.3～	–	横ナデ	不明	–	–	△	△	○	良好	橙 7.5YR7/6	

14－17	C 4	4号住居	下層	弥生	高坏、鉢？	表面	－	△	－	(12.2)	9.8～	－	横方向ハケメ	縦方向ハケメ	－	－	×	○	○	良好	明黄褐 10YR7/6	斜め上方から穿孔２個。四方に縦くもりのとおもわれるが、90度の組はずれる。円盤にシボり痕。
16－1	C 6	5号土坑	床直	弥生	鉢	口縁～底	完形	×	9.4	0.8（丸）	5.0	9.6	不明	不明	－	－	×	◎	△	良好	橙 7.5YR6/6	外面に黒斑あり。
18－1	E 3	6号住居	1層	弥生	壺	口頸部	－	－	不明	－	2.6～	－	不明	不明	－	－	×	○	○	やや不良	にぶい黄橙 10YR6/4	
21－1	D 8	8号住居	床直	弥生	甕	上半部	1／2	○	(17.2)	－	11.7～	(19.4)	不明	不明	－	－	×	◎	△	やや不良	黄橙 7.5YR8/8	
21－2	C 8	8号住居	床直	弥生	壺	口頸部	－	○	(19.0)	－	8.6～	－	ナデ	タタキ	－	－	△	△	○	やや不良	橙 7.5YR6/6	焼成後穿孔平長製鍋。
21－3	D 8	8号住居	床直	弥生	壺	下半部	1／3	×	－	不明	11.8～	不明	ハケメ？	縦方向ハケメ？	ナデ？	ナデ？	△	○	△	やや不良	黄橙 7.5YR8/8	
21－4	C 8	8号住居	床直	弥生	甕	脚	－	○	－	(10.8)	4.3～	－	不明	不明	－	－	×	○	○	やや不良	明黄褐 10YR7/6	剥離面あり。
21－5	D 8	8号住居	床直	弥生	鉢	口縁～体	－	－	不明	－	7.2～	不明	不明	不明	－	－	△	○大	△	やや不良	明赤褐 5YR5/6	
21－6	D 8	8号住居	床直	弥生	小型	口縁～体	3／4	○	(13.4)	－	9.2～	(15.2)	ハケメ、ナデ？	ハケメ、横ナデ？	－	－	○	△	△	良好	橙 7.5YR7/6	粘土、色調は他の土器と変わらないが、さめが強く、まるで土師器のような小さな壺。砂未焼。
21－7	C 8	8号住居	床直	弥生	壺	口頸部	－	－	不明	－	2.6～	－	横ナデ？	横ナデ？	－	－	△	○	○密は	やや不良	橙 7.5YR7/6	
21－8	D 8	8号住居	床直	弥生	高坏	脚柱上部	－	○	－	－	4.2～	－	ナデ	縦方向ハケメ？	－	－	○	△	△	良好	橙 7.5YR7/6	剥離面あり。
21－9	C 8	8号住居	1層	弥生	壺	口頸部	－	－	不明	－	5.0～	－	ナデ？	ナデ？	－	－	×	○	○	やや不良	橙 7.5YR6/6	
21－10	D 8	8号住居	1層	弥生	壺	体部	1／8	○	－	－	7.8～	(19.8)	不明	不明	－	－	△	○大	△	良好	橙 7.5YR7/6	河原砂文。２個張りつけ。四方に赤くかどりが付不明。
21－11	C 8	8号住居	2層	弥生	高坏	口頸部	－	○	(26.4)	－	4.6～	(27.0)	ナデ？	ナデ？	－	－	△	○大	△	良好	明黄褐 10YR7/6	
21－12	D 8	8号住居	3層	弥生	小型	口縁～体	1／6	○	(16.0)	－	7.0～	(16.7)	不明	不明	－	－	×	△	○	やや不良	明黄褐 10YR6/6	
21－13	D 8	8号住居	3～4層	弥生	壺	底部（丸）	－	×	－	1.6	2.2～	－	ナデ	ナデ	－	－	×	○	△	良好	明黄褐 10YR6/6	
24－1	D 8	9号住居	床直	弥生	ジョッキ状土器	脚手	－	－	－	－	6.6～	－	－	工具によるナデ	－	－	×	△	○	やや不良	橙 7.5YR6/6	部分的に整備する。
24－2	D 8	9号住居	トレンチ	弥生	甕	脚柱端部	－	○	－	(10.6)	4.2～	－	不明	不明	－	－	×	○	△	やや不良	橙 7.5YR6/6	底部に黒斑アリ。
24－3	D 8	9号住居	3層	弥生	鉢	口縁～体	－	○	(13.8)	－	5.8～	(15.2)	不明	不明	－	－	△	○	△	やや不良	橙 5YR6/6	口縁部に黒斑アリ。
26－1	B 8	10号住居	床直	弥生	小型	口縁～体	－	○	(14.2)	－	5.2～	(20.6)	不明	不明	－	－	×	○	△	やや不良	赤褐 2.5YR4/6	№59と同一個体か？
26－2	B 8	10号住居	床直	弥生	壺	口頸部	－	○	(11.6)	－	8.0～	－	横方向ハケメ	縦方向ハケメ	－	－	△	○	△	やや不良	赤褐 2.5YR4/6	口縁はやや内湾する。
26－3	D 8	10号住居	床直	弥生	小型	底部		○		7.1	3.3～		ハケメ	不明	ハケメ	不明	×	○	△	やや不良	赤褐 2.5YR4/6	黒斑アリ。
29－1	D 3	1号土坑	上層	弥生	鉢、甕？	脚台端部	－	○	－	(10.2)	3.2～	－	不明	不明	－	－	×	○	△	やや不良	橙 7.5YR7/6	
30－1	D 3	2号土坑	床直	古代	須恵器坏	口縁～底	1／2	△	(12.4)	7.2	3.6	(12.6)	回転横ナデ	回転横ナデ	回ケズリ	ヘラ切り	×	△	金黒色粒	やや不良	灰色 10Y6/1	底石が多く含まれる。石回転。
30－2	D 3	2号土坑	床直	古代	須恵器坏	口縁～底	4／5	×	12.6	8.6	4.0	12.8	回転横ナデ	回転横ナデ	回ケズリ	ヘラ切り	×	△	金黒色粒	やや不良	灰白色 10Y7/1	
30－3	D 3	2号土坑	3層	古代	須恵器坏	口縁～底	1/12完形	×	13.2	7.1	6.3	13.4	回転横ナデ	回転横ナデ	回ケズリ	ヘラ切り	×	△	金黒色粒	やや不良	にぶい橙 7.5YR6/3	口縁端一部欠損。方台り。主鉱物、金属顕微鏡。8c末～9c初（鍋田）or 9c末～10c初（水野）
30－4	E 2	2号土坑	一括	古代	須恵器	口頸部	－	○	(24.0)	－	7.6～	－	不明	不明	－	－	△	○	△	やや不良	にぶい黄橙 10YR7/2	
34－1	E 10	溝	9層	古代	土師器坏	口縁～底	1／2	○	(15.9)	(10.9)	3.2	(16.2)	不明	不明	不明	不明	○	△	△	やや不良	橙 7.5YR7/6	
34－2	D 9	溝	9層	古代	土師器坏	底部	－	○	－	(7.8)	2.4～	－	不明	横ナデ	－	横ナデ	△	○	○	良好	橙 5YR6/6	
34－3	D 9	溝	11層	古代	土師器坏	底部	1／4	×	－	7.0	2.5～	－	横ナデ？	横ナデ？	指ナデ	ヘラ切り	△	△	○	やや不良	橙 7.5YR7/6	底径高1.0、底径径2.4

34－4	E10	淡	11層	古代	土師器坏	底部	1/3	×	－	6.8	3.3～	－	横ナデ	横ナデ	斜ナデ	ヘラ切り	◎	△	△	ややボ良	にぶい黄橙10YR7/4	高台高1.0、高台径7.2
34－5	D9	淡	11層	古代	土師器坏	体部	1/3	△	不明	不明	4.9～	不明	横ナデ	横ナデ	斜ナデ	ヘラ切り	○	△	○密度	やや不良	にぶい黄橙10YR7/4	高台高1.0～、高台径6.6～
34－6	D10	淡	11層	古代	土師器坏	底部	1/3	×	－	6.2	1.1～	－	－	－	斜ナデ	ヘラ切り	×	△	◎	やや不良	にぶい黄橙10YR7/4	
34－7	D10	淡	11層	古代	土師器坏	底部	1/3	×	－	7.0	2.0	－	－	横ナデ	斜ナデ	ヘラ切り	○	△	○密度	やや不良	橙7.5YR7/6	高台高0.8、高台径7.4
34－8	D10	淡	11層	古代	土師器坏	底部	1/3	△	－	7.8	3.0～	－	－	－	ナデ	ヘラ切り	△	△	◎	やや不良	橙7.5YR7/6	高台高1.1、高台径8.2
34－9	D10	淡	10層	古代	丸瓦		－	×	－	－	7.0～	－	布目痕	タタキ、指頭圧痕あり	－	－	×	△	△密	良好	N8/Y	内面瓦部剥がれ痕跡。
34－10	D10	淡	11層	弥生	甕	頸台	－	○	－	不明	4.6～	－	横ナデ	ナデ	指頭圧痕アリ	ナデ	◎	○	△	良好	橙7.5YR7/6	
34－11	D10	淡	11層	弥生	高坏	脚部～脚	－	×	－	－	7.2～	－	不明	縦方向ハケメ	不明	－	×	◎	△	良好	橙5YR6/6	

（註）1．「種別番号」は種別番号と1部に付した番号を組み合わせている。
2．「反転復元」について、説明は以下の通りで使用している。
「○」…反転復元したもの
「△」…一部反転復元したもの
「×」…反転復元できないもの
「　」…反転復元しなくても器がでるもの
3．「胎土」は混入の度合いが大きいものから順に◎・○・△・×としている。

第Ⅳ章　まとめ

平嶋遺跡では弥生時代の竪穴住居跡11棟と古代の土坑３基、弥生時代から中世にかけての溝と複数のピット状遺構、不明遺構１基を検出した。以下、遺跡の主な時代である弥生時代の遺構・遺物等について、まとめていきたいと思う。

1　出土土器と集落全体の時期について

本遺跡の南南東約６km の場所に野部田遺跡（玉名郡天水町）がある。ここから出土した土器は野部田式土器と呼称され、弥生時代後期後半～終末期の標式土器となっている。

昭和26年の調査で出土したものに下前原遺跡（玉名郡岱明町）出土の土器をくわえたもので形式設定が行われた。また本遺跡と同じく菊池川流域（中流域）に所在する津袋大塚遺跡（鹿本郡鹿本町）から出土した土器はⅠ期とⅡ期に分けられ、Ⅱ期にまとめられた土器群が当該時期にあたるとされている。いわゆる野部田式とされている弥生時代後期後半～終末期における土器の特徴は、次のようなものである。

甕―口縁部がくの字形に屈曲し、胴部は長く、底部に脚台がつく。器面は内外面ともにハケメで仕上げるが、タタキ痕が残るものもある。

鉢―脚台が付くものと付かないものがある。器面はナデ・ハケメで調整する。

壺―大型と小型がある。大型壺は細長い卵形をした胴部にラッパ状に開く口縁部がつく。胴部にタタキ痕が残る。内外面ともハケメ調整である。肩部に櫛描波状文や竹管文がつくこともある。小型壺は卵形をした胴部にくの字形の口縁部がついたものと、土師器の小型丸底坩のようなものとがある。

高坏―坏部は浅く、脚柱から裾部にかけて広がり、口縁部は軽く立ちあがって開く。脚部には穴が穿たれる。器面はヘラみがきとハケメ仕上げがある。

器台―上部が開いた筒状。器面はハケメ仕上げで、タタキ痕が残るものもある。

その他ジョッキ型土器やグラス型土器がある。

（以上参考文献による。）

今回の調査で出土した弥生土器の器種は甕・鉢・壺（大・小）・高坏・ジョッキ型土器である。完形で出土したものはなく、図化は反転復元して行っているものが多い。破片で出土したものがほとんどだったため全体像が把握できたものはないが、口縁・裾端部の形状、残存部から推定される器形、最終調整などからみると、本遺跡の出土土器の様相はいわゆる野部田式土器とされているものの特徴に近似する。

それに先行する時期・後続の土器は出土しておらず、したがって本遺跡の住居跡から出土した土器はおおむね弥生時代後期後半と見ることができる。遺物がほとんど出土していない住居跡についても、遺構のきりあいや形状などから同時期のものと見て差し支えないと思われる。

2　土器の胎土の違いと住居の時期差について

土器の胎土を肉眼で観察するうち、３種類に大別できることがわかった。Ａ－赤色（酸化）粒の粒が比較的大きく（１～３mm）混入の割合が高いもの、Ｂ－石英・長石の粒が比較的大きく（２、３mm）混入の割合が高いもの、Ｃ－砂粒が比較的細かく角閃石・雲母等が適度に混入するもの、の３種である。赤色粒はべんがら状を呈するものもあり、紙の上にこぼれおちた粒子をつぶすと赤い顔料のようになる。Ａの赤色粒は粘土層に含まれる鉄分と見られ、Ｂ，Ｃに含まれる石英・長石、雲母・角閃石等は花崗岩を構成する鉱物である。第３章で実測した土器について、上記の３種類の胎土を住居ごとに示したのが第３表である。

これを見ると、胎土の差は器種の違いというよりも住居ごとに偏りがあることがわかる。Ａは４号竪穴住居跡に圧倒的に多く、２号竪穴住居跡や８号竪穴住居跡の出土遺物には少量含まれる。Ｂは３号竪

穴住居跡や10号竪穴住居跡に見られるが、２号竪穴住居跡や８号竪穴住居跡ではＢとＣが混在している。また溝出土の土師器坏はＡとＣが半々になっており、赤色粒ではなく灰色を帯びた黒色粒を含む坏もある。

胎土を比較してみた場合、２号竪穴住居跡と８号竪穴住居跡はともにＢとＣの組み合わせである。２号竪穴住居跡にわずかにきられる４号竪穴住居跡は最もＡの割合が高い住居跡であるが他の住居跡と比較すると土器の出土量自体が多い。その下に３号竪穴住居跡や９号竪穴住居跡などＢを主体とする土器が出土する住居跡がある。ただし３号竪穴住居跡は上部を大幅に削平されているし９号竪穴住居跡は８号竪穴住居跡に大部分をきられているため検討のための十分な資料が呈示されているとは言えない。

前述の通り、出土土器の器形は弥生時代後期後半の一時期に収まるものである。土器の胎土の差異を微妙な住居時期差と仮定すれば、切り合い関係が面的に確認できる調査区中央部では次のような変遷を追うことができる。

１　２号・８号竪穴住居
　　↓
２　４号竪穴住居
　　↓
３　３号・５号・９号竪穴住居

これらは主軸の方位もあまり変わらない。３については５号竪穴住居跡と９号竪穴住居跡が近接しているためさらに一時期増える可能性もある。

ところで調査区の北方に玉名市菅山田団地が隣接しているが、建設時に弥生時代の甕棺が見つかっている。また調査区の北方を北東－南西方向に走る道路を建設したときには弥生時代の住居跡が見つかっている。最近では調査区の北東方向約500mのところでアパートを建設した際にベッド状遺構を伴う住居跡が確認されている。

以上のことから集落が北東～北～北西の方向、つまり台地の広がる方向に向かって展開していることは明らかである。また調査区の南西端で溝を検出しているが、住居跡群と同時期に築造されたものと考えられ、環濠である可能性が高い。環濠は一般的に防禦のためとも区画のためとも言われ、弥生時代を通して見られる構築物である。本遺跡で検出した溝を環濠と仮定すると、一定の区画を完結する円で取り囲むのではなく、一部は斜面にぶつかる構造となるであろう。九州における弥生時代の環濠は後期後半の時期に属する集落に調査例が多く見られ、台地上に立地する例が多い。概して環濠の内部の規模は数十メートルから数百メートルの長さがあるが、今回の調査では溝と住居跡群との関係や集落の範囲等について明確にはできなかった。今後本遺跡近辺の調査例が増えるにつれ集落の様相も明らかになっていくと思われる。

3　溝について

溝は２面に分けられる。第１面の溝は弥生時代の住居跡をきっており、古代の特徴を持つ遺物が第１面の底面で点在しながら出土していることと、埋土に青磁が含まれることから、古代から中世にかけて埋没したものと思われる。第２面の溝はそれ以前のものとなるが、遺物を伴わないため築造時期は不明である。ただし包含層中に縄文時代や古墳時代等の遺物が含まれないことから弥生時代の溝である可能性が高い。

第２面の溝が機能を停止したあとは自然に土砂が堆積し、古代以後、より積極的に土地の高低差をなくしていったものかと思われる。

4　２号土坑の遺物について

土坑は全部で３基検出したが、時期を判断する材料となる遺物を伴うものは２号土坑のみである。遺物は須恵器３点であるが、中でも第28図の３は最も床面に近いものである。類例はほとんどないが、色調や形状から玉名郡内で焼かれた８世紀末から９世紀初頭にかけての時期のものではないかと思われる。[1]

[1] 網田龍生氏のご教示による。

（参考文献）

「ムラと地域社会の変貌－弥生から古墳へ－」第37回埋蔵文化財研究集会資料、1995年
原田範昭「熊本」『弥生時代の集落－中・後期を中心として－』
第45回埋蔵文化財研究集会資料、1999年
金関恕・佐原眞編「弥生文化の研究　第７巻弥生集落」雄山閣出版株式会社、1997年
宮本長二郎「日本原始古代の住居建築」中央公論美術出版、平成８年
佐藤伸二「野部田式土器」大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本土器事典』
雄山閣出版株式会社、1996年
坪井清足「埋蔵文化財と考古学」平凡社、昭和61年
小野忠熙編「高地性集落跡の研究　資料篇」学生社、昭和54年
「熊本県の地名」日本歴史地名体系44、平凡社、1985年
荒尾市史編集委員会編「荒尾市史」荒尾市、平成12年
玉名市史編集委員会編「玉名市史　資料篇３　自然・民俗」玉名市、平成５年
南関町史編集委員会編「南関町史」南関町、平成９年
玉東町史編集委員会編「玉東町史」玉東町、平成７年
「玉名市歴史資料集成第12集　市制40周年記念　玉名郡衙」玉名市・秘書企画課、平成６年
山鹿市立博物館編「山鹿市立博物館調査報告書第７集　方保田東原遺跡（３）」
山鹿市教育委員会、昭和62年
西住欣一郎編「熊本県文化財調査報告第121集　うてな遺跡」熊本県教育委員会、1992年
木崎康弘編「熊本県文化財調査報告第158集　蒲生・上の原遺跡」熊本県教育委員会、1996年

ほか

報告書抄録

ふ り が な	ひらしまいせき
書　　名	平嶋遺跡
副　書　名	教職員玉名住宅新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告書
シリーズ番号	第204集
編 著 者 名	後藤　貴美子
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒862-8570　熊本県水前寺６丁目18番１号　℡096-383-1111（内線6725）
発行年月日	西暦2001年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
ひらしま 平　嶋	くまもとけんたまなし 熊本県玉名市 おおあざやまだあざひらしま 大字山田字平嶋	43206	490	32度 55分 52秒	130度 32分 35秒	1999.10.12 ～ 1999.12.01	250m^2	共同住宅

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平　嶋	集落	弥生時代 平安時代	竪穴住居跡　11 溝　1 土坑　3	弥生土器、 土師器、須恵器	

図　　版

図版１　平嶋遺跡（１）

１　平嶋遺跡遠景（南から）

２　平嶋遺跡調査区全景（南東から）

図版２　平嶋遺跡（２）

1　溝遺物出土状況（全体）

2　溝遺物出土状況（部分）

3　溝完掘状況（全体）

4　溝完掘状況（部分）

5　４号竪穴住居跡遺物出土状況（全体）

6　４号竪穴住居跡遺物出土状況（部分）

図版３　平嶋遺跡（３）

１　２号竪穴住居跡完掘状況

２　３号竪穴住居跡完掘状況

３　４号竪穴住居跡完掘状況

４　８号竪穴住居跡完掘状況

５　８号竪穴住居跡南側ベッド部除去後状況

６　11号竪穴住居跡完掘状況

図版４　平嶋遺跡（４）

１　９号竪穴住居跡炭化物出土状況

２　２号土坑遺物出土状況（全体）

３　２号土坑遺物出土状況（部分）

図版５　平嶋遺跡出土遺物（１）

8－5

13－5

13－12

14－17

13－1

13－8

14－15

図版６　平嶋遺跡出土遺物（２）

21－２

21－６

21－10

24－３

30－１

30－２

30－３

34－３

熊本県文化財調査報告　第204集

平　嶋　遺　跡

平成13年12月28日

編集
発行　熊　本　県　教　育　委　員　会
〒862-8570熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　シモダ印刷株式会社熊本支店
〒862-0951熊本市上水前寺2丁目16-16

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 204 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。
底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 平嶋遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日